

中国戦あれこれ

中国戦についてであります。昭和49年、私が古賀同好会長の下で、重工本社のテニス部長をしておりました時に、中国といっぺん親善試合をやってはどうかという話が持ち上がりました。重工の古賀さん、商事の藤野さん、銀行の田実さんの御三家が、田中角栄首相訪中の直後に、中国の再建にはでかい友達が必要だという認識の下、三菱三井に対してもこういう機会があったら参加しろという話があり、お三方が三菱の代表として訪中されたように記憶しております。それをきっかけに運動の交流としてサッカーをやろうじゃないかということで、重工のサッカーチームが48年6月に中国へ遠征しました。

ところがその時にテニスもあるということで、49年7月に同好会の皆さんの御意見も承りながら、会長が古賀さんでございましたので招こうじゃないかということになりました。当時中国は全く分からない国で、どのくらいのレベルなのかとか、昔は強かったらしいとかを山岸さんがおっしゃる程度で、誰もさっぱり分からない。いろいろ疑心暗鬼ながら、まあ10億人もいるのだから一人ぐらい強いのもいるだろうというように、初めは軽い気持ちで、オール三菱で行うつもりだったのですが、日中文化交流協会の村岡恭平氏から、「一企業グループである三菱庭球同好会の招きでは駄目だ」ということで日本庭球協会の招待という形をとって招いたのであります。それで初めは日本のナショナルチームと対戦したのですが、当日はたまたまデ杯のアジア予選がオーストラリアで開催されており、二軍で挑んだところ見事にやられてしまい、最後の2日間を三菱に割いてくれました。

当時は、極右も極左もおり、大学紛争が終わって2、3年の頃で政情は必ずしも安定していないため、警備をどうするかということで、私も警視庁外事課や高輪警察署、田無警察署へお願いに上がりました。結局宿舎のニューオータニは当然警視庁、武蔵野コートは田無署、開東閣は高輪署が覆面パトロールという形で警備をしました。当日は武蔵野コートへお入りいただくOBの方々、グループの方には保籍をしっかりとと言う警視庁からの御指摘があり、已もう得ず黄色いリボンを作り入門の際つけていただいて御記帳願いました。ご来賓の一部の方からは、「何でこんなものをつけなければならないのだ」と不平を言われましたが、当局からは、どんな時にも中に何人いるのか事務局は把握しろというきついお達しでした。また、ニューオータニから武蔵野グランドまで御案内した訳ですが、どの辺を何時ごろに通過するかということまでちゃんと調べろということで、リハーサルをする等、警備は本当に大変でした。それから、お昼についても中華料理でも台湾系ではだめだ。大陸系でも北京がいいのか四省がいいのかといろいろ考えさせられました。各社幹事にはいろいろお世話になりましたが、当社では佐藤君が日中文化交流会、同好会関係は堀君がもっぱら交渉に当たっ

てくれました。本当にみんなの協力でこのような行事が出来上がったと思っております。

戦績は、中国が全勝でした。エキジビションで高橋・半那選手ペアが、先方の団長・副団長ペアにセットオールで引き分けるのがやっとでした。プレーヤーの平均年齢が26、7弱で、皆カモシカの足と言うのはこんな足をしているのかなあというような足をしていましたし、経歴を見ますと上海市の体育委員会の委員だとかで国家公務員なのです。かつてのロシアもそうでしたが、追いつけ追い越せで、ああいう体制の違う国でのスポーツのあり方には考えさせられました。まあ、つくづく思い知らされるような見事な負けっぷりでした。全日本も負けたのですから…。

パーティーは開東閣でしたが、これには三菱各社のトップがほとんど全員御出席下さって大変感激しました。お酒は茅台酒とか招興酒とかいろいろ考えたのですが、若いせいか結局中国側は何も飲みません。日本側が専ら飲んだ訳です。開東閣の上品な料理では彼ら全然足りないらしくて、いい印象はもってくれたようですが、帰ってニューオータニのガーデンバーベキューで牛肉を食べた時が一番うれしそうな顔をしておりました。私も彼らとの別れに当たって非常に感動した訳ですが、こんな立派なことをさせていただいたのは皆同好会の皆さん方の賜物だと思います。

もう一つ付け加えますとその日は、当時のアメリカの駐日大使インガーソル氏へ三菱銀行の幹部がゴルフのお誘いをしたところ、「ゴルフなんかは、アメリカでは誰もがするものだ。私はテニスをしたい」と言われて、武蔵野コートを使いたいということになりました。武蔵野コートは日中の大会をすることになっており大変泡を食いましたが、たまたま出来上がった重工の調布の人工芝コートに御案内し、銀行の方も御了解をいただいて、つつがなく日中の大会を実施することができました。アメリカのほうでは、エリートはゴルフじゃなくてテニスをするのだということを初めて知りました。当時、人工芝のコートは日本で出始めた頃であったので滑ったりすれば必ずやお尻をやけどするようなコートで、バウンドもおかしければ、スリッパもできない、無理にスリッパすればやけどをするコートでした。これも古賀さんの肝入りでできたコートであります。そういう中国戦でした。無事に終えたということが何よりも幸いだったと思います。

(商事・武田氏)

私は昭和47年入社なので、3年目にこの試合に出させていただいたのですが、コテンパンにやられた記憶がございます。その後の開東閣の懇親会も参加させていただきまして、三菱のそうそうたるメンバーがお集まりになっていた記憶と、選手紹介になるまで壇に上がっていた時に、当時最年少だったということで、歌を歌えと言う指示がออกมาして、「幸せなら手を叩こう」を歌った記憶がございます。中国戦はワッペンを確か作りましたが、今も大事にとっております。

(商事 原田氏)

茅台酒が臭かったのを覚えております。それから中国のメンバーはユニフォーム、靴、ラケット男女とも全部同じで、これが非常に印象深かったです。共産国ということでしょうか。ラケットはエアプレインズというマークのものを持っていました。一番面白かったのが男性も女性も皆同じユニフォームです。靴も全部そろってありました。私は参加（見学）だけさせていただいて、三菱の最初のコートで中華料理、開東閣も参加だけさせて頂きました。いい思い出になっております。

（銀行・飯野氏）

昭和 49 年と言いますと私は業務第一部長でかつ庭球部長でありましたので、コート提供会社として、また三菱グループの一員としてどうしても一日コートに行ってくれという話がありました。銀行庭球部の青木君（当時の監督）を始め、若手の突き上げで、とにかく大事なことだから一日行こうということで武蔵野に参りました。一番びっくりしたのは中国側が圧倒的に強いということです。前の日までは、まあ、ああいうお国だからあんまり強くないので私がお相手してもいいんじゃないのかなあと考えていたのが、とんでもないことだったという感想を持っております。そして確か銀行の No1 である青木君もちろん出場したわけですが、問題なくやっつけられたのが記憶と印象であります。それから、やっぱりああいうお国はお国の費用でお国からラケットもユニフォームも全部与えられて、お国の費用でテニスなりサッカーなり陸上競技なり何でもやれるんだからそういえばそれは当然かなと多少悪口めいたものを持った記憶があります。一番困りましたのは開東閣で今日の自分のプレーを見てどうだったのか等いろいろな質問を受けたことであり、私みたいなのがテニスの実力は拙劣なので批評のしようがないから、当たり障りのない批評を申し上げて、そうすると通訳を通じてうんうんとうなずいてくれたのが私の記憶に残っているところであります。そして私が考えている以上に、選ばれている人だから背が高かったのでしょうか、平均的な私の中国人像よりはだいぶ背の高い、体格のよい選手が多かったのが印象的でした。

（銀行・塚原氏）

今日のお話を伺って、これから是非オール三菱といった形でどこかと試合ができればいいなあと思います。団体戦で組めるのは三井戦ぐらいしかないのでは何かの機会にできればと思います。

（復活 50 周年記念誌 伊藤修一郎氏講話より原文）